

口頭表現能力養成のためのテキスト分析

－初級修了者向け－

丸谷 しのぶ

要旨

初級コースを修了した大学院レベルの学習者は、運用力不足を指摘されることが多い。本稿では、既存の初級修了者用口頭表現能力養成テキストを概観し、口頭表現能力としての運用力をどう養成しようとしているかを分析した。その結果、既存のテキストは初級修了者共通の問題点にかなりよく対応していることがわかった。

しかし、大学院レベルの初級修了者を対象としたクラスでは、既存の口頭表現能力養成テキストが学習者のニーズや興味に合致せず使いにくい、という経験をする人が多い。研究者予備軍としての大学院レベル学習者を対象にした教材開発は今後の課題である。教材開発の際には、研究者としての日常生活や研究者同士の交流に必要な口頭表現能力とは何か、という視点も必要であると思われる。

キーワード 大学院生、初級終了レベル、口頭表現能力養成、テキスト、研究者

1. はじめに

大学院生向け初級日本語コース（いわゆる、研修コース）を修了した学習者（以下、初級修了者と称す）にとって、学習した項目の運用力を伸ばすことは重要な課題である。初級コースで文型積み上げ式に知識として獲得した日本語が十分に使えるレベルに未だ至っていない、という学習者が多いからである。使用できる語彙が少ない、既習の言語的要素の組み合わせ、バリエーションに対処できない、などといった初級項目の未消化からくる問題点に加え、「口頭表現能力」については、次のような弱点が見られることが多い。

- ・ 現実の状況や場面、話題に合った、適切な表現を使って話すことができない。
- ・ 談話レベルの知識（対人関係と表現の関わり、会話のルール、スピーチの組み立て方など）や表現、運用力が不足している。

こうした弱点故に、日本語学習に対して不満、焦り、あきらめといった感情を持つ学習者もいる。

こうした初級修了者の口頭表現の運用力養成を目的にした教材にはどのようなものがあるのだろうか。本稿では、初級修了者向け口頭表現能力養成を目的とした既存テキストを概観し、その特徴をまとめる。さらに、既存テキストの問題点を指摘し、対応策の方向性について、若干の私見を述べる。

2. 分析対象としたテキスト

概観するテキストは、日本語教材リスト No.28（1998～1999年 凡人社）を参考に、次の4条件を満たすものを選んだ。

- ・初級修了レベルのもの
- ・口頭表現能力養成を主な目的としているもの
- ・大学生、大学院生を主な対象としているもの
- ・例えば「ビジネスの会話」のように、特定の目的に限定しないもの

本稿で分析対象としたテキストは、以下の14種である。発行年の古いものから配列し、書誌情報(書名、発行年、著者・編者、発行・発売の順)を記載する。

表：分析対象としたテキストのシラバスと練習

	A 中心となるシラバス	B 練習内容と形式		
		a) 文型・語彙・表現レベルの練習	b) 談話レベルの基本練習	c) 談話レベルの応用練習
ロールプレーで学ぶ会話1	場面・機能	機能表現の紹介と練習(一部有り)	場面を提示しての会話練習(一部有り)	ロールプレー
現代日本語コース中級1(但し「会話」部分のみ)	機能・場面	機能表現に関する対話形式の練習	会話に特徴的な談話要素に関する練習	ロールプレー(一部あり)
リーとクラークの冒険	場面・機能	穴埋め、聴解、QA形式の練習など	モデル会話の再現練習、会話パターンを利用した談話練習	会話作り、ロールプレー
留学生の日本語会話	場面・機能	代入練習、QA形式の練習、文完成練習、穴埋めなど	モデル会話の再現練習、会話内容を別の立場で伝達する練習	インフォメーションギャップによる伝達練習、インタビュー、ディスカッション、発表、スピーチ、会話作り
自然な日本語 中級用会話教材	構造	代入練習、文完成練習など		
絵で学ぶコミュニケーション	トピック			ロールプレー、ディスカッション、インタビュー、ディベート、報告
実践力のつく日本語学習・インタビュー編	トピック			提示された質問項目を使ったインタビュー、フォーマットを使ったインタビュー結果の報告
日本語で話そう4	トピック+構造	文作り、対話形式の代入練習など	モデル会話の聴解、会話パターンを利用した談話練習	話題を提示しての自由発話
日本語会話中級1	トピック	代入練習、文作りなど	モデル会話の聴解、会話パターンを利用した談話練習	話題や課題を示しての自由な会話、発表、報告など
これが日本だ!	トピック			ロールプレー、ディスカッション
日本語初中級・理解から発話へ	構造	対話形式の代入練習		
会話のほんご・ドリル&タスク	構造	文型確認のためのクイズ、インフォメーションギャップによる練習		
なめらか日本語会話	機能・場面	話し言葉(音変化、形態的特徴、機能的慣用表現)に関する理解確認クイズ	モデル会話の聴解、再現練習	
日本語作文とスピーチのレッスン～初級から中級へ～	トピック			口頭発表 モデル文を利用して、口頭発表の原稿を書く

- 1) ロールプレーで学ぶ 会話(1) 1987年 日本語教授法研究会 凡人社
- 2) 現代日本語コース中級1 1988-90年 名古屋大学日本語教育研究グループ 名古屋大学出版会
- 3) 日本語会話中級教科書1 リーとクラークの冒険 1988年初版 1992年改訂版
山上明、鶴田庸子 イーストビュー出版 凡人社
- 4) 留学生の日本語会話 1990年 国際学友会日本語学校国際学友会日本語学
- 5) 自然な日本語・中級用会話教材 1991年 桜井晴美 凡人社
- 6) 絵で学ぶコミュニケーション・〈会社・生活編〉20のトピック 1991年
高岸雅子、松本久美子、川越菜穂子 凡人社
- 7) 実践力のつく日本語学習インタビュー編 1992年 谷口聡人、堀歌子、野村美知子 アルク
- 8) 日本語で話そう4 1992年 高柳和子、広瀬万里子 英語教育協議会
- 9) 日本語会話中級1、2 1993年 高柳和子、遠藤祐子、袴田陽子(1、2とも)、武井直紀、
渡辺尚子(1のみ) TIJ日本語教材開発グループ
- 10) これが日本だ! 1993年 刈谷仁美、高橋優子
日本語教育研究会資料シリーズ編集委員会編 凡人社
- 11) 日本語初中級・理解から発話へ 1995年 名古屋YWCA教材作成グループ
スリーエーネットワーク
- 12) 会話のほんご 1996年 佐々木瑞枝、門倉正美 ジャパンタイムズ
- 13) なめらか日本語会話 1997年 富坂容子 アルク
- 14) 日本語作文とスピーチのレッスン～初級から中級へ～ 1998年 鶴沢梢 アルク

3. 教材分析の観点

教材の分析は次の三つの観点から行われることが多い。^{*1}

- ・どのようなシラバスによっているか。
- ・どのような教授法を前提に作られているか。
- ・どのような教室活動を想定しているか。

このうち、第2の観点「教授法」は第3の観点「教室活動」に反映されているものと考え^{*2}、本稿で取り上げる教材については、次の2点から分析を行う。

- 1) どのようなシラバスによっているか。
- 2) どのような教室活動を想定しているか。

*1 田中(1988)pp.191-192

*2 テキストが前提とする教授法については、テキスト記載の「テキストの使用方法、授業の進め方」といった項目から、ある程度伺い知ることができる。本稿の分析対象テキストには、いわゆるコミュニケーション的アプローチの考え方による指導を前提としているように思われるテキストがいくつかあった。これは、コミュニケーション的アプローチの考え方が、初級修了レベルテキストの作成意図(学んだ日本語が使える状況や場面を与え、できるだけ現実に近い形で運用の機会を提供しようとする作成意図)になじみやすいものであるため、と考えられる。しかし、分析対象テキストの中には、教授法がはっきりしないものも多く、テキスト作成者の想定とテキストの練習内容や練習方法が必ずしも対応しているとは思えないものもあったため、第3の観点に焦点を当てて分析することにした。

4. 分析対象テキスト概観

本節では先に述べた教材分析の観点に従って、分析対象としたテキストの全体的な特徴を概観する。

4. 1 シラバス

テキストのシラバスは、中心となるシラバスと補助シラバスによって構成されるのが一般的である。表の A 欄は、分析対象テキストごとに中心となるシラバスを挙げたものである。これを見ると、機能・場面シラバスをが5種、トピックシラバスが5種、構造シラバス(いわゆる文法シラバス)が3種、トピック+構造の混成シラバスが1種あることがわかる。

トピックシラバスや機能・場面シラバスを中心的なシラバスとするテキストは、話題や場面を与えた運用練習に重点を置くもので、状況や場面に応じた適切な表現、談話レベルでの運用といった初級修了者の弱点克服を目的とするテキストには適切なシラバスだといえる。一方、構造シラバスを中心的なシラバスとして採用するテキストは、初級学習項目の復習に重点を置いたテキストであると考えられ、初級修了者の中で初級の学習項目が十分に消化できていない学習者には、構造シラバスによるテキストの使用が適切な場合もあると思われる。

4. 2 教室活動—練習—

分析対象テキストのように口頭表現の運用力養成を目的とするテキストの場合、課の構成要素(モデル会話、解説、練習、資料、視覚情報、テープなど)のうち、特に練習部分に教室活動の特徴が顕著に表れると考えられる。そこで本節では、テキストの練習部分に焦点をあてて、分析をまとめる。

分析対象テキストの練習内容を見ると、概ね次の3種類に分けられる。練習内容をどのような形式で練習させようとしているかについても、併せて挙げておく。テキストごとの練習内容と形式については、表のB欄をご参照いただきたい。

a) 内容：文型・語彙・表現レベルの練習

形式：代入練習、穴埋め練習、文完成練習、対話形式の練習、QA形式の練習、インフォメーションギャップによる練習 など

b) 内容：談話レベルの基本練習

形式：モデル会話の聴解、再現練習、会話パターンを利用した談話練習 など

c) 内容：談話レベルの応用練習

形式：インフォメーションギャップによる練習、ロールプレー、インタビュー、ディスカッション、報告、発表 など

a) は文型・語彙・表現レベルでの運用力養成を中心とした練習で、既習項目の運用練習を中心に、必要に応じて新しい文型・語彙・表現の理解確認・運用練習なども行うものである。b) は談話レベルの基本練習で、談話のルールや内容の理解を確認する練習とその再現を主な練習内容とするもの、c) は同じく談話レベルの練習で学習者による自由なプロダクションを中心にした練習である。a) b) は、既習項目の復習的性格が強く、c) はこのa) b) より上のレベルの発展練習と位置付けられる。c) の中には、言語的要素を積み上げ、目的とする活動を完成させるボトムアップ型の練習と、課題が提示され、それに関わる様々な情報（語彙・文型に関するものから社会・文化的なものまで）を処理することによって課題を遂行するトップダウン型の練習が見られる。

分析対象テキストの練習では、a) b) c) を組み合わせたものが6種で一番多く、次いでc) のみのもの4種、a) のみのもの3種、a) b) のもの1種、となっている。

a) b) c) を組み合わせた練習は、復習的な練習a) b) を行った上で、あるトピックや場面・状況の下での発展練習c) を提供するもので、初級修了者の弱点を総合的に強化しようとするものと言える。これに対し、a) b) c) いずれかを欠く場合には、学習者の必要に応じて、テキストにない部分を補完して利用することが必要な場合もあるものと思われる。

5. 初級修了者向け口頭表現能力養成テキストの問題点

冒頭「1. はじめに」でも述べたように、初級修了者に共通の問題は、「口頭表現能力として初級項目を運用する力が十分に養成されていない」という点にある。分析対象テキストを概観したところでは、これらのテキストは、初級修了者共通の問題点にかなりよく対応している、と総括することができる。

しかし、これらのテキストが運用力養成のために取り上げている場面、機能、トピックの内容や練習のあり方を見てみると、本稿で初級修了者と称してきた大学院学習者が必要とするものに対応できるのかどうか、疑問に思われるところがある。テキストに示された場面、機能、トピック及びそれに関連した練習は、教室活動としてよく考えられているものが多いが、いざ、それを行おうとすると、大学院学習者の生活、ニーズ、興味などからはかけ離れているということがよくある。そのため、学習者に練習の必要性を認識させたり、興味や好奇心を喚起したりすることがむずかしい場合が少なくない。これは、既存の市販テキストを使って大学院学習者を対象としたクラスを行っていくときの大きな問題点である。

本稿で初級修了者と称してきた大学院学習者は、研究者（の卵）として来日し、研究に必要な日本語を身につけようとしている者がほとんどであろう。このような大学院学習者にとって初級が修了した段階というのは、いわゆる一般日本語から専門日本語への移行期

にあると考えられる。こうした学習の段階を考えたとき、初級修了レベルの口頭表現として、どのようなことを学ぶのが適当なのだろうか。

残念ながら本稿では、この問題について論じる用意がない。^{*3}これは、今後の課題として。本稿では、大学院初級修了学習者に対する口頭表現能力養成の一つの方向性について提言を行い、まとめにかえる。

6. 大学院初級修了者の口頭表現能力養成の一つの方向性～まとめにかえて

各研究分野には、「サブ専門用語」というべき表現がある。「サブ専門用語」とは、専門用語とは違い、普段の生活でも普通に使われている言葉が、ある研究分野での表現として使われると、その分野特有の意味を担うようになるものをいう。研究者としては、その分野での意味を知り、適切に使うことが要求される表現である。こうした「サブ専門用語」獲得の重要性は、これまでも指摘されてきた。^{*4}

このような「サブ専門用語」は、どのようにして獲得されるのだろうか。ある分野の専門用語なら、専門の辞書等から明確な定義を知ることができる。しかし、「サブ専門用語」については、その分野のいわば常識であり、辞書の項目としてはとりあげられることはまずない。「サブ専門用語」は、研究分野の先輩から伝授されたり、他の研究者の使用に接して使い方を盗んだりして身につけるものではなからうか。つまり、研究者に必須の「サブ専門用語」は、その研究分野の人々との交流によって、獲得していくものであると考えられる。

また、「サブ専門用語」以外の研究分野の常識に属する様々な事柄についても、他の研究者との交流の中から獲得していくものであろう。さらに、研究そのものの継続、発展のためにも、他の研究者との交流、いわゆる研究者ネットワークの果たす役割が大きい。つまり、研究者には必要不可欠のものとして、「研究分野の人々との交流関係を築いていくための日本語」を身につけることが要求されると考えられるのである。これは、「研究者としての日常生活」に必要な日本語であり、研究成果を発表するための日本語（研究発表や論文執筆など）とはまた違った性格をもつものではないかと考えられる。

こうした「研究者と交流していくための口頭表現能力」、「研究者としての日常生活に必要な話す力」という視点で大学院学習者に必要な口頭表現能力を考えることは、これまであまり体系的には行われてこなかったのではなからうか。こうした方向で初級終了レベ

* 3 因(1998)では、大学院学習者とその指導教官を対象にした日本語に関する調査報告がなされている。このように、大学院生のみならず、それを取り巻く環境についても調査を行いニーズ分析をしていくことが必要であると思われる。

* 4 深沢(1994)では、こうした「サブ専門用語」を「準専門用語」と称し、一見すると専門用語らしくないが専門教官が専門用語と認定しているものと定義し、その重要性を論じている。

ルの口頭表現能力養成の教材を考えると、場面、機能、トピックとして採り上げるべき事柄も練習のあり方も、当然従来のものとは違ってくるはずである。また、こうした方向での教材であれば、大学院学習者の生活、ニーズ、興味などからかけ離れていて、学習者のモチベーションを喚起するのが困難である、という既存テキストの問題点も克服できるのではないだろうか。

【参考文献】

- 田中 望(1988)『日本語教育の方法～コースデザインの実際～』大修館書店
因 京子・栗山昌子・上垣康与・吉川裕子(1998)「大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの－日本語の到達度は何を示すのか－」『日本語教育』99号
深沢のぞみ(1994)「科学技術論文作成を目指した作文指導－専門教員と日本語教師の視点の違いを中心に－」『日本語教育』84号

資料-----各テキストの特徴

本稿での分析対象テキストの特徴、活用の際の留意点などを資料として付す。教材に関する情報として役立つとだけだとするところがあるとすれば、幸いである。

- 1) ロールプレーで学ぶ 会話(1) 1987年 日本語教授法研究会
機能シラバスによるロールプレー用の教材。ロールカード、ロールプレーに必要な語彙・表現、会話例(16例のみ)が提示されている。初級修了者にとっては、ロールカードや例文に使われている語彙・表現を理解するための手当が必要である。また、学習者の日本語レベルや学習者の生活に合った場面設定にロール内容を変えて、ロールプレーを行わせることも必要であろう。
- 2) 現代日本語コース 中級1 1988-90年 名古屋大学日本語教育研究グループ
話し言葉の指導に重点を置いた総合教科書。「会話」部分で必要度の高い機能会話を主に扱っている。性別による文末形式の特徴、縮約形、待遇の違いによる文体の使い分けなどの指導ができる。ただし、内容の場面適用練習が少なく、使用の際には、適用場面の設定を考えて練習する必要がある。
- 3) リーとクラークの冒険 1988年 山上明、鶴田庸子
日常会話の表現に重点を置いた教科書。各課の会話は全体として一つの物語になっており、各課の会話の中で使われた表現の解説、練習がある。すべての練習にテープを使うのが特徴で、テープの会話の聴解、再現、テープとの会話、テープの会話モデルを利用した応用練習などがある。一部、解説事項の確認クイズもある。初級の既習事項が会話の中で使えるようにする練習が豊富。学習者の自習用にも適している。
- 4) 留学生の日本語会話 1990年 国際学友会日本語学校
場面・機能シラバスによるテキスト。留學生生活で遭遇する場面ごとに必要な語彙・表現を扱っている。前半部分は留學生が来日からすぐ必要となる日常会話を場面シラバスで提示、後半部分は機能会話や性別・場面による文体の違いなどを指導する会話を扱う。前半は、初級レベルの学習者にも必要度が高い会話が提示されている。学習者のニーズに合わせて適宜課を選択し、モジュール的に使用できる。
- 5) 自然な日本語・中級用会話教材 1991年 桜井晴美
構造シラバスによるテキスト。4コマ漫画で日常会話で頻繁に使われる語彙・表現を提示している。口頭による運用練習は示されていない。
- 6) 絵で学ぶコミュニケーション・〈会社・生活編〉20のトピック 1991年 高岸雅子、松本久美子、川越菜穂子
トピックシラバスによるトップダウン型の活動のためのテキスト。会社、生活に関わるトピックを

2～3枚組の絵で紙芝居風に提示し、この絵を出発点に、学習者の既得知識（言語的なものから社会・文化的なものまで）を引き出しつつ、必要な語彙・表現、知識を加えていく。学習内容や課題、練習内容や形式などの設定がかなり自由に行え、学習者に応じた教材化が可能である。詳しい指導マニュアルもあり、参考になる。学習の正否は教師の裁量によるところが大きく、教師の教材作成の負担も大きい。いわゆる項目積み上げ式の学習を好む学習者は抵抗感を持つ可能性がある。また、話題の選択が難しい場合もある。

7) 実践力のつく日本語学習インタビュー編 1992年 谷口聡人、堀歌子、野村美知子

トピックシラバスによる副教材テキスト。インタビューに必要な語彙・表現や必要資料が提示され、インタビューの質問項目と回答の選択肢、集計のフォーマット、結果発表の枠組みも示されている。どのトピックもインタビューや発表の形が決められており、いずれも同じ様な形式である。したがって、学習者の興味にあったトピックを選び、モジュール教材として使用するのが適当であると思われる。

8) 日本語で話そう4 1992年 英語教育協議会

トピックシラバスと構造シラバスの混成シラバスによるテキスト。話題に関する興味喚起の質問、モデル会話の提示、必要な語彙・表現の練習、モデル会話のパターンを踏襲した聴解など、きめ細かく練習した上で、最終的には学習者による自由な発話为目标になっている。目標に至るまでにモデル会話のパターンが何度も繰り返されるため、時間がかかり、学習者が飽きてくる嫌いがある。学習者の様子を見て練習を取捨選択するなど、アレンジしながら使うのがよいのではないか。

9) 日本語会話中級1、2 1993年 TUJ日本語教材開発グループ

トピックシラバスによるテキスト。話題に関する興味喚起の質問、テープによるモデル会話の聴解、必要な語彙・表現のクイズなどがあり、最終的には学習者による自由な発話为目标としている。8)『日本語で話そう4』と同じタイプのテキストだが、8)ほど同じパターンの繰り返しが多くなく、語彙・表現のクイズは学習者の予習を前提とするなど、最終的な目標＝「話題や課題を提示しての自由な発話」が教室活動の中心になるよう、工夫されている。

10) これが日本だ！ 1993年 日本語教育研究会資料シリーズ編集委員会編

トピックシラバスによる「お芝居」としてのロールプレアのテキスト。グラフ、記事、意見などの資料によってロールカードが作られており、日本社会の問題点に関わるトピックを扱っている。ロールカードの内容の理解、「お芝居」としてのロールプレアの遂行など、学習者にはかなり高度な日本語力が要求され、初級修了者には負担が大きすぎる。トップダウン型の活動のテキストであるため、語彙・表現面の手当を行う教材の新たな作成が必須である。指導例が一例ある。

11) 日本語初中級・理解から発話へ 1995年 名古屋YWCA教材作成グループ

構造シラバスによるテキスト。日本語の基本的構造の把握と運用力の養成を目的としている。会話例や問題の内容はよく吟味されているが、構造把握に重点を置いており、会話クラス向けの教材としては利用しにくい。

12) 会話のにほんご 1996年 佐々木瑞枝、門倉正美

構造シラバスによるテキスト。練習は、初級学習項目の復習に重点を置いたインフォメーションギャップによる練習が中心となっている。モデル会話やその応答バリエーションの提示はあるが、これを練習させるための場面、状況の設定が少ない。

13) なめらか日本語会話 1997年 富坂容子

会話、話し言葉の特徴に焦点を当てた副教材。話し言葉の音の変化、形態的に見た話し言葉のルール（縮約、省略、繰り返しなど）、機能的に見た話し言葉特有の表現（話の切り出し方、相づち、会話の進め方など）を紹介し、その理解を確認する問題（選択・文完成クイズ、聴解など）がある。性別、年齢、社会的役割による言葉遣いの違いについても考慮している。使用の際には、学習内容の導入に適した場面の設定、語彙・表現の手当、運用練習のための場面等を考える必要がある。難しい語彙や表現が多く、語彙・表現に対する手当は不可欠である。初級修了者には使いにくい。

14) 日本語作文とスピーチのレッスン～初級から中級へ～ 1998年 鶴沢梢

トピックシラバスによる、口頭発表に焦点を当てたテキスト。モジュール的に使用できる。学習者が与えられた課題を遂行するトップダウン型のテキストであるが、口頭発表のモデルの提示とその理解のための語彙、文型の手当があり、課題を遂行するための具体的な手順の指示が詳しく示されているところがよい。Show and Tell, Storytelling 等、英語のスピーチでよく行われる活動を取り入れている。口頭発表をスムーズに行わせるためには、準備段階で教師が発表原稿やメモを十分チェックしておかなければならない。

付記

テキストの分析にあたり、田中久美子さん（一橋大学留学生センター）にご協力とアドバイスをいただいた。

